

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

オプション教材ムベ 読解マラソン集

ムベ

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

どんなときにイヌは怒るのかといえば、まず自分の縄張りに侵入されたときである。たとえば、ボールが生垣の下からよその家の庭に転がり込む。それを取りに庭へ入り込んで、もしそこにイヌがいたら、帰りがけに、後ろから尻を咬まれるだろう。その家が留守ではなく、イヌにはボスにあたる飼い主がいたら、いつもは臆病なイヌでも攻撃的になって当然である。

警察犬や軍用犬用に特別に訓練されたイヌは別だが、イヌにとって人間を襲うことは、かなりの勇気のいる行為である。たとえ相手が小学生であっても、目の位置はイヌよりも上にある。イヌは家畜として人間と一緒に暮らしてから一万年以上も経ってはいても、その目に映るホモサピエンスは、大きな動物に見えるはずである。目の位置からの判断では子どもだって月の輪熊よりは大きい。したがって、イヌが人を咬むのは、せっぱ詰まっただけの反撃なのであり、原因のほとんどを人間のほうが作っている。

イヌが怒りを爆発させて、攻撃を仕かける前には、まず警戒のボデイランゲージを見せる。背なかの毛を立て、四肢を踏ん張って、尾を小刻みに振るのは、相手を警戒している証拠である。気が弱いイヌなら、このとき口を上にもかけて吠えたてる。吠え声は仲間に援助をもとめるためのものである。

気の強いイヌほど、この警戒から怒りへの移行は早い。尾をぴんと立て、歯をむきだしにして、唸り声をだしたら危ない。このときの耳は後方に引かれて伏せられている。この怒りを無視して近づいたら咬まれることになる。

人間でも親しい人は別として、赤の他人が、ある一定の距離を超えて近づいてきたら不快感を持つ。満員電車がその好例だ。われわれが満員電車に乗れるのは、社会の通念という、ひとつの約束事を理性が知っているからである。だから同じ電車の同じ車輦という空間でも、ガラガラに空いているとき、なぜか赤の他人が自分に

接近して、服と服が接触する距離まできたら、普通の神経の持ち主なら不安感を抱くだろう。相手がこわそうな男なら、不安はすぐ恐怖に変わると思う。

動物学会ではこの不快感を持つ距離を臨界距離というわけだが、イヌにも当然、この距離がある。相手が親愛の意を示さずにこの距離の中へ踏み込めば、イヌの感情が不安、警戒、怒りと移行していくのは不思議ではない。

うっかり臨界距離まで近づいたら、どうするか。そんなときは、さりげなく距離を広げるのが良い。あわてて駆け出すとイヌの狩本能を刺激して追いかけられる。中型犬だと百メートルを七秒以内で駆けるから、ルイスだってジョイナーだって逃げられるものではない。イヌの目を絶対に見ないようにして、静々と退却するのが賢明な策なのである。

イヌを座らせて叱言をいったことのある人は知っていると思うが、叱言をいわれているイヌは絶対といっていいほど、人の眼を見つめないものである。イヌにとって視線を合わせるのは挑発を意味するからである。これ以上、叱言をいわれたくないイヌは視線をそらすわけだ。したがって、警戒態勢でいるイヌをみつめたらイヌは怒りだす道理である。

(沼田陽一「イヌはなぜ人間になつたのか」)



冬のパリは、灰色の暗い空におおわれる。その下を、毛皮のオー
バーを着こんだ婦人たちが体つきの小さな犬を連れて歩いていく。

犬にも胴まわり^{どうまわり}に毛皮で編んだものを着せたりして、かわいい。

そこには、しかし、一つのはっきりしたヨーロッパ人の考えが表さ
れている。犬には保護を加えるが自由な意志は認めない。犬にひもを

つなぎ、その端をしつかりにぎって、犬を連れて歩くのが人間とい
うものであり、犬に引っぱられて歩くのでは人間とはいえない。大きい
犬だと、この点うまくいかないし、だいいちパリのようなアパート生
活では、飼いにくい。

「お母さん、今あなたはお子さんの手を引いていますか。警視庁」な
どという、まことに親切な看板が東京都内のあちこちに立っている。

小さな子供は、たしかにパツと衝動的^{しょうどうてき}に往来へと飛び出したりす
る。母親が魚屋や八百屋の店先で、買い物に目の色を変えているとき

などとくに危ない。つまり、小さな子は子犬みたいなものだ。

犬なら、ひもでつなぐのが、いちばんである。それが最も確実安全
で、子供を死地に追いやることもなく、親も保護監督^{かんとうくく}の義務をちゃんと果
たすことができる。つまりは、子供のため、親のため、ということ
になる。

パリの若い母親は、これを実行している。ちよこちよこ歩きはじめ

たわが子に「腰なわ^{こしなわ}」を打ち、自分の胴体^{どうたい}にそのひもをくくりつけて
買い物をする。いかに目をはなし、おしやべりに夢中になろうとも、
子供には一、二メートルの行動半径しか自由がないわけだから、ぜつ
たいに安心である。したがって、パリには警視庁のような看板は立っ
ていない。

「かわいそうで、そんなこと、とつてもできないわ。」と日本のお母
さんがたはおつしやるにちがいない。そこにはヨーロッパと日本の文
化の差、有畜農業^{ゆうちくぬぎょう}と無畜農業^{むちくぬぎょう}の差が横たわっている。ヨーロッ
パ人は長い間、家畜^{かちく}を大切に飼ひ、農耕に使い、そして殺して食べることに
よって生きてきた。家畜^{かちく}なしには、そもそも生活が成り立たなかつ
た。

家畜^{かちく}のように理性を持たぬ生き物を人間、ないしは人間社会のルー
ルに従わせるには、体でおぼえさせるほかはない。この家畜飼育法^{かちくしよくほう}
が、幼い子供へのしつけにも応用されている。

「おはようございます。」というまでは朝ごはんを食べさせない、道
にすてたゴミを自分でひろってゴミ入れに入れるまでは自由^{あたら}を与えな
い、といったしつけが、日常茶飯事として、おだやかに、しかし、き
びしくくり返される。

それでも言うことをきかなければ、人前だろうとなかろうと、遠慮^{えんりよ}
会釈^{えしやく}なく、おしりをたたく。なおだめなら、最後は裁判所^{さいばんしょ}にうつたえ
出る。すると、裁判長は、理由^{いかりゆ}の如何を問わず子供に対する逮捕状^{たいほじょう}
を出し、少年院に強制収容する。一九七〇年までのフランスがそうで
あった。

ラッシュアワーは別として、昼どきの日本の電車内は、子供の遊園
地と化す。子供たちはのびのびと電車内で徒競走に興じ、つりかわで
ブランコを楽しむ。母親は子供に、次から次へと食べ物^{あた}を与えてい
る。幸せな光景である。日本は無畜農業^{むちくぬぎょう}の国だから、家畜^{かちく}や子供を
威厳^{いげん}をもってたたき、しつけながら愛情^{あいじやう}をもって育てるという考え方
がない。日本は昔から子供に対するしつけがあまかったようである。
稲や白菜^{いね}をむちでたたいてみても、どうなるものでもない。育てるコ
ツはただ一つ、ひたすらこやしをかけることだけだ。

ヨーロッパの子供が子犬なら、日本の子供は稲か白菜である。だか
ら、母親は車内で子供をしかることもなく、アメダのチョコレートだ
のを与^{あた}えている。あれはせつせとこやしをかけているのだ。土にお
いに満ちた民族の遠い記憶^{きおく}が、そうさせるのにちがいない。

(木村尚三郎^{しやうざうらう}の文章より)



「竹下君よ」と山田が思い出したようにいった。

「昇は少し生意気なのと違うか」

「今日もな」と秀がいかいけると、

「おれもなあ」と松も何かいかけようとした。

二人が同時に何かを訴えようとするのをさえぎるように進がいった。

「昇のことは任しとけ。もう少したつたらちよつと痛い目に合

てやろうと思うとれど、病気がりやから遠慮しとるんや」

「そうやろう、おれもそう思つとつたわ」と山田が安心したようにいった。

「病気になる前もえらい生意気なところがあつたなあ、竹下君」と松がいった。

「磯介とよ」と山田が吐き捨てるようにいった。

「まあ任せとけ」と進が落ち着いた声でいうと、「われらにいいもの

やるつちや」とポケットからゴソゴソと袋を取り出し、みんなにその

中味を一つずつ与えた。さつまいもをふかして干したものだつた。

「これなあ、焼いて食べると、もつとうまいんやけどなあ」としばらくして進がぼくにいった。

「そうやろうなあ」とあいづちを打つたが、ぼくは焼かないでもおいしいと思つた。今までに見たことはあつても、食べたのはこれが初めて

だつた。米の供出量の関係で、伯父の家はさつまいもを作つてい

なかつた。乾燥いもはぼくがふだんから食べてみたいと願つていたもの

の一つだつた。ぼくは心の中でひそかにそうしたものをみんなに貢がせて食べるこ

とのできる進の立場をうらやましく思ひながら、同時にそう思つてい

る自分を取じた。「うまいじゃあ、竹下君、この乾燥いも」とふだん絶対といつてい

ぐらい、おこぼれにあずかれない一郎が、一番うしろの列から感激の

声を挙げた。こんな風に進がみんなに貢物を分かち与えたことは今

までになかつたことだつた。

「もう一枚ずつやるわい」と進はいつて、みんなにまた一枚ずつわ

け与えた。どれも分厚いみごとな乾燥いもだつた。

「竹下君よ」と磯介がいった。「この乾燥いも、昇が持つて来たんやろう」

「それがどうした」と進が不機嫌に答えた。

ぼくはひどくがっかりした。その時まで昇だけが進に対等の態度

を取ろうとする勇氣を持った唯一の同級生かも知れないと思つていた

からである。ぼくはこんな夢さえ抱いていたのだつた。昇とぼくの

二人はいつか協力して進の専制的な暴君ぶりを改めさせる、進は前非

を悔いる。級の空気は一変し、みんなが同じような立場で、仲よくは

つらつとつき合えるようになる。ぼくは維新を、革命を夢みていたのだ

だつた。その主要な立て役者だつた昇が脱落してしまつたのだ。

「もうずつと遊びに入れてやらあ」と松がいった。

「ああ、様子を見てな」と進が不機嫌に答える。

ぼくは進に今さらのように恐怖の念を覚えた。進の権力の偉大さを

まざまざと知らされた思いがした。もうこれからは一切進に反抗する

のは止めようとぼくは考えた。——できるだけ心して進の御機嫌を損

じないように努め、進の庇護を仰ごう。それがここにいる間、戦争が

勝つまでここに暮らしている間、ぼくの安全を確保する唯一の道なの

だ。心を売らなくてもいい、表面だけでもそういう態度をとらなくて

はならない、とぼくは自分にいい聞かせた。



「潔」と進がいった。「われのところ、新しい本が東京から送って来た」と違ちがうか」

「ああ」ぼくはいった。「この間、小包で送って来たんや」

「貸してくれんか」と進はやさしくいった。

「いいよ」

とぼくはほとんどいそいそとしていった。進の意を迎むかえることのできる材料が意外にも身近にあったのがうれしかった。

「今日持って行くか」

「おれがわれんちに行くわい」と進はいった。

その日進は約束した通りやって来た。ぼくはかれを自分の部屋に通して、伯母おばにたのんでそこに作ってもらってあったこたつに入るように勧めた。

進はぼくの見せた本のどれにもこれにも目をかがやかした。

「東京にはもつとあるんやろう」

「たのむから送ってもらうてくれんか」

「おれ今まで家の手伝いで読めんなんだろう、冬に入つてようやく読む時間ができたんや」

「四月に入れば、中学に入るための勉強せんらんから、読めんようになるしな」

と進は興奮したように次から次へとしゃべった。

東京に残っている本を小分けにして小包で送って欲しいとその日のうちに手紙でたのんでみると進に約束すると、進はようやく興奮を鎮しずめ安心した風を見せた。

——その日進は高垣眸たかがきひとみの「竜神丸りゅうじん」と南洋一郎よういちろうの「吼える密林ほ」とを借りて行った。

そして進との交友は再び復活し、冬休みの時と同じくらいの頻度ひんどでおたがいの家を往ゆき来した。家での進は学校での進と別人の観かんがあった。進が学校でも、家で会う時と同じように振る舞まつてくれたら、ぼくは進を本当に親友と見なし大切に思ったに違ちがいない。しかしぼくは家を出て家に帰るまでの進の専横せんわうな振る舞まいを決して忘れるわけには行かなかった。進がそんなぼくの気持ちに感づいていたかどうかは分からなかった。しかしとにかくぼくたちは二人だけでいる限り、気が合い、話題も尽つきなかった。話は戦争の見込みこみや、

勉強の計画、自分たちの将来などに及およんだ。

たとえば将来の夢について、「戦争が長びくようやったら」と進はいうのだった。

「おれア、海兵を受けることにやっぱり決めたわ」

もし終わったらどうするかというぼくの問いに対してかれは答えた。

「高等学校へ入って帝大ていへ行き高文を受けて、官吏かんりになるわ、われの家の人みたいにな」

かれの頭に、成功した郷里せんばいの先輩としてぼくの父が描えがかれていたことに間違まちがいなかった。そしてかれがおそれていることは戦争が早く終わって、ぼくが東京に早く引き揚あげてしまひ、一緒に受験勉強もできなくなってしまうことらしかった。その証拠に、かれは何度となく、

「戦争が終わっても六年はここで終えて行くのやろ、それから東京の中学を受ければいいにか」とぼくに確かめたからである。もちろんぼくはそうするつもりだと嘘うそをついた。

ぼくらはよく一緒に風呂へも行った。すると風呂で一緒になる大人たちは、浜見一番のあんばはま（しつかり者の長男）と寛平かんへいの東京の子がすっかり意気投合し親友になったことを祝福してくれた。するとぼくの心は自分が間違まちがって見られていることに對する不満と、そんな風に誤解されてもしようがないように振る舞まっている自分に対する嫌忌けんきの念にひそかに包まれた。ぼくはいつも心の奥底で、自己に忠実でありたかったから、家に帰ってからの進との往き来を今のような形で続けるのを拒否きよひすべきか、もしくは進の方で学校での態度を改めるべきだと思っていた。そのことが二つとも実現しない限り、自分に忠実でなく、虚偽きよぎの生活を行っているのだと思っていたのだ。しかし現実のぼくは、内心の願いとはまったく逆に、昇のぼるの貢物みつものの一件以来、進の勢力の偉大さを思い知らされ、もはや昇と協力して級を改革する夢にふけることもできなくなり、努めて進の意にそうように振る舞まっているのだった——



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「後の世話が大変だから、雀の子だけはごめんだよ。それに死んだらかわいそうなもの」

とお母さんはうるさく言う。よくわかつていっているんだけど、小雀の声を聞くと狩猟本能が目覚め、お母さんの言いつけなんかふつとんでしまう。

庭で雀捕りなんかすると、きつと叱られるから、お城へ行くことにした。そこにはこの季節になると、大書院の屋根の下で生まれて巣立った小雀がたくさんいる。

お城の桜の木に、数羽の小雀がさえずっている。甘い声が胸をくすぐる。でも、萌えたつた若葉にさえぎられ、姿はなかなか見えない。ためつすがめつ見つめていると、灰色の影が、においたつ若葉の中をすつと動くのがわかる。胸がどきどきしてくる。目が輝き、鼓膜がぴいんとはりつめる。ぼくはあの勇ましい獵犬だ。いや獵犬は木に登れないから、猿だ。でも、猿って小鳥を捕って食べるのかなあ……？ 獵犬だって猿だってなんだっていい。ぼくは伏せ網をもって木に登った。

小雀は声こそ細くて幼いが、体は小さくても親鳥と同じく、独り暮らしで生きる力をもう十分もっている。近づく、あわやというところですつと飛び立ってしまう。くやしいたらないが、ぼくの負けだ。こんなのをいくら追っかけて、むだ。つかまえることは、発育の遅い子雀を探し出し、それを徹底的に追いまわすことだ。そのうち小雀は疲れて動けなくなる。作戦変更。

数本の桜の木をあたった末、一度に数メートルしか飛べない小雀を見つけた。もう半分捕れたようなものだ。

桜から桜へ、二人は小雀を追っかけた。小雀がふらつきながら、横の桜へ移ったとき、「しめたっ」と心の中で叫んだ。近くに木はない。一丁上がりだ。

ぼくは落ち着いて桜の幹に手をかける。虫を狙うカメレオンのように、ゆっくり距離を縮めていく。小雀はまだ口許の黄色い、小さ

いくちばしを突き出し、あらぬかなたを見つめている。その先は澄みわたった青空だ。でも怖い目つきは、雲へでも飛び移りそうな氣配だ。

ぼくは胸いっぱい広がるよろこびで、思わず頬がほころびる。勝利のカイカンつてやつだ。ちらつと下を見る。射ぬくようなミトの真剣なまなざしが、ぼくの目に力チツとあたる。ぼくはそれにこたえて伏せ網をたぐり出し、最後の一突きの準備にかかった。小雀のまんなかい目が、少し小さくなつたように見えた。まぶたが下がってきたのだろうか。小鳥はどれも、目をつぶりだしたらもうおしまい。元気がなくなつた証拠だ。小雀は疲れはて、飛び立つエネルギーがなくなつたのだろうか。

ふいと浮かんだあわれみの心が、網の動きを乱し、テグスが小枝にひっかかった。引っぱると、小枝がゆれた。それが合図になつたのかのように、小雀は全身の力を借りて、白い雲に向かって飛び立った。

小雀は数メートル水平に飛ぶと、力つきて下へさがったが、また力をもりかえて上昇した。こんなことを繰り返しながら、波を描いて石垣の際の土手の桜まで飛んでいった。あつけにとられてその姿を見ながら、なぜかきいっと心にくいいるものを感じていた。

「えらいやつよ」

ミトが木の下から感にたえぬようにいう。

「うん、やるなあ」

ぼくは木の股にまたがって、空を見る。桜の若葉が青空に美しい模様を彫りこんでいる。手がだるい。足から力もぬけている。「逃がしてやるか」そんな思いが、ふつと心をよぎる。ミトもそう思っているにちがいない。青葉の蔭から放心したように空の一点を見つめていた丸い目と、甘えつ子みたいな黄色いくちばしが頭に中にちらつくの、火をたくお陽様に投げこんで、ぼくは猿のようにすばしっこく木を降りる。

(河合雅雄「小さな博物誌」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

みつちゃんは、私より一つ年下だったが、太っていて、相撲は強かった。しかし丈が低かったから、馬飛びといって、かがんだ相手の背中に手を突いて飛び越える遊びは、丈の高い私の方が有利だった。地面に手を突いた姿勢から、だんだん高くして行つて、ほとんど首を曲げた姿勢で立っている「馬」の上を飛び越える。飛び損なつた子は飛び越えられるのが専門の馬にならなければならない。あるいは「馬」の手前にかがむ役になる。

最初は横丁の子供たちがかわりばんこに飛び越すことからはじまるこの遊びは、最後は、必ず私が何人かのかがんだ子供の上を跳躍して、その先の「馬」の背中に手を突いて飛び越す形になった。この場合かなりの助走を必要とし、飛んだ瞬間、体は水平に近くなるから、馬になつた子供が受ける衝撃は大きくなる。

こういう形の時、馬になれるような子供は横丁にはみつちゃんよりいない。私は得意になって、この跳躍を何度も繰り返した。するとその何度目かに、私が跳躍した瞬間、みつちゃんがひよいと背を低くしたのである。私は空を突き、向こうの地べたへ腕から水平に着地した。両ひじとひざを大きく擦りむいた。みつちゃんはほかのみそっかすの子供といっしょに、どこかへ逃げてしまった。

私は泣きながら家に帰った。隣の家と私の家の間にある共同の井戸端で、母に泥と血を洗ってもらっている、みつちゃんがお母さんに捜しだされて、通りかかった。お母さんに命ぜられて、私に謝つたが、私は許さなかつた。バケツ一杯の水をぎぶりとかけてやつた。みつちゃんも泣きだし、かかつてこようとしたが、お母さんに引つ張って行かれた。

私には人間がこんなに悪意があることをするとは思ひも寄らなかつた。私に餓鬼大将の横暴があつたにしても、そんならみつちゃんは馬になるのはいやだ、といえはいいのである。決定的な瞬間に、ひよいと背をかかめて、裏切るのはひきようだ、水ぐらいかけてやつてもいいというのが私の論理だった。もつともこの場合、私

の方には、大人がそばにいて、状況が自分に有利だったという甘えがあるから、あまり威張れない節もあるのだが。

私の復讐はさらに奇妙な形で果たされた。みつちゃんの家との間の路地に物置があつて、その床下、というほどもない狭いすき間に、私はナマリメンの貯金を隠しておいた。母の財布から盗んだ小銭の残りも入れておいたが、ある日、それがそっくりなくなっていた。まもなく隣家でみつちゃんが泣き叫ぶ声が聞こえた。せつかんを受けているらしく、声は異様な悲痛さで長く続いた。みつちゃんがメンコと金の隠匿犯人と見なされたのはあきらかだった。私はおばさんが母に言いつけにくるのを覚悟したが、おばさんは来なかつた。あくる日、床下に手を突つこんでみると、金もメンコも戻されていた。おばさんと井戸端で顔を合わせると、その顔は異様な笑みをたたえていた。そこには私に対する非難はなく、自分の家の子供が盗つてなかつたことを喜ぶ表情だけがあつた。（私が金の隠し場所を机のひきだしに変えたのはそれからである）

私はみつちゃんに会うことを避けたが、みつちゃんも何も言わなかつた。これは私にしばらく罪の意識として残った。いまこれを書きながら、この二つの事件の前後について反省してみた。みつちゃんが馬飛びでふいにしゃがんだのはこの事件に対する報復ではなかつたか、ということである。しかし、どうもそうではなかつたようである。それなら私は報復をおそれ警戒したはずだし、水をかけることもできなかったと思う。

（大岡昇平「少年」）



自宅や会社の電話番号を忘れないのは、そこに何度も電話をかけることによって、反復学習しているからだとも言える。記憶には、この反復学習が非常に効果があると言われている。

記憶について研究した人に、ドイツのエビングハウスがいる。このエビングハウスによると、何かを一度覚えても、二〇分後にはその半分を忘れ、二四時間後に三分の二を忘れてしまう。しかし、残された三分の一はなかなか忘れず、一カ月後でも五分の一ほどを思い出すことができるという。

しかもこのとき、一度覚えたことを、少し間を置いて再び思い出させたところ、それから二四時間経つてもその八割がたを記憶していたそうだ。

つまり、一度記憶しただけでは覚え切れなくても、それを反復して覚えさせると記憶はより確かになる。だから、一度習ったことはそのままにしないで、もう一度思い出してみるか、同じことをもう一度記憶するべきである。一度の反復学習で駄目なら、二度、三度とやってみる。それでも駄目なら七度も八度も繰り返して覚える。こうして飽きずに反復学習を繰り返していくと、たいいていのものは頭の中に定着してしまう。

勉強で、予習と同時に復習が大切だと言われるのは、このような脳のメカニズムを利用しているわけだ。また、自宅や会社の電話番号を覚えられるのも結局、何度も同じ場所に電話をかけているうちに無意識に復習しているからである。

記憶は、自信とも関係がある。

スタンダールの「赤と黒」の中で、主人公のジュリアン・ソレルが密使となり、長文の手紙を届ける場面がある。ジュリアン・ソレルは、途中で敵に捕らえられてもいいように、その手紙を受け取ると同時に全文を暗記しようとする。密書を託した人間は不安になって、「忘れるのではないか」と問いただが、ジュリアン・ソレルは、「私自身が、忘れはしまいかと心配しないかぎり大丈夫だ」と答える。

「ひよつとして忘れるのではないか」という自信のなさ、記憶力を減退させる原因の一つである。絶対に忘れないという確信をもち、自己暗示をかければ、人はどんなことでも記憶していられると

いうことなのだ。

人間の記憶は、脳の「海馬」という部分で行なわれている。海馬というのはちようどタツノオトシゴのような形をしているので、その名がある。

海馬は、約四〇〇〇万個の神経細胞から成り立っており、輪切りになった形の細胞が幾万も積み重なっているが、海馬の断面は、この無数の神経細胞が中心に向かって環状に並んでいるのがわかる。つまりバナナを輪切りにしたときのような感じである。

この環状の様子は、ちようど金太郎飴のようになっていて、どこまでいっても同じ構造になっている。そして、それが幾層にも積み重なっている。ちようどスーパーコンピュータの内部構造に似ている。この輪切りの細胞の間には神経細胞が結ばれている。この神経細胞は、輪切り細胞に貯えられた記憶データを脳まで伝える役目を担っている。

ところが、このとき、よく電気信号が通じている回路と、そうでない回路とができる。よく電気信号が通じる回路は、思い出しやすい記憶ということだ。

このすぐに通じる回路がなぜできるかというと、それはその記憶が頭にこびりついてしまったからである。頭にこびりついた原因には二つある。一つは何度となくそれが反復されたからであり、もう一つはその記憶がとても印象深く心に刻みつけられたからである。結局、よく記憶するためには、反復して覚え込むかそれとも強い関心や印象、あるいは興味をもつてそのことを学ぶかなのである。

もう一つ、面白い記憶法がある。

ちよつと古い話になるが、テレビを観ていたら、「梅千と日本刀」の著者、樋口清之さんがNHKの子ども向け番組に出演していた。子どもも質問に各界の専門家が三、四人並んで答えるという番組であった。

そのとき、ある子どもが、「樋口先生は記憶力が抜群だと聞いていますが、覚えるコツというものはありますか」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

と質問した。すると樋口さんは、一つの事柄に対してその記憶事項を思い出すためのヒント（引き出しの糸）をたくさんもつことだ、と答えていらつしやった。

大脳には記憶の倉庫があり、そこにはいくつもの引き出しがあつて、記憶が収められている。この引き出しを開けるにはそれに糸をつけ、その糸を引っ張る必要がある。ところが引き出しを開ける糸が一本しかない、その糸を探すのにはたいへんな苦勞をする。一つの引き出しに何本も糸がついていれば、どの糸を引っ張っても記憶は引き出せる。つまり一つの記憶に対していくつものキーワードをもてば、記憶は引き出しやすくなる。

たとえば戦国の武将「織田信長」のことなら、「本能寺の変」「桶狭間の合戦」「比叡山焼き打ち」「安土城」などと関連づけて覚える。また「本能寺の変」なら信長を討った「明智光秀」も記憶する。どの糸を引っ張っても「織田信長」が出てくるわけだ。

また、いくつもの無意味な言葉の羅列などを記憶するには、全身を使うとよいとされている。たとえば、二〇個くらいの単語を覚えるとき、それをまず五個ずつのグループに分けておく。そうしてまず第一グループを覚えるとき、たとえば左手と関連づけて覚えておく。第二グループは右手、第三グループは左足、第四グループは右足といった具合に、体の手や足などの部分を記憶の引き出しにしておくわけである。

（竹内均「頭をよくする私の方法」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



人間が自由で平等だということがあることが、原則として認められている社会、これが、近代だといってよいでしょう。

それでは、そういうものが果たして我々日本人に固有のものか、我々自身の生活の中から出てきたものかという点、これはそうではないということが、すぐお分かりになると思います。近代的なものは、生活の観念にしろ、社会生活の形にしろ、みな西洋から来ています。

西洋人にとって近代は、つまり自分の中から出たものです。自分たちのものの考え方、あるいは感じ方の必然の結果です。ところが、我々にとっては、それはよそから受け入れたものだ。そのところが、同じ近代でも甚だ違うのです。

近代をよく理解した人たちは、日本の近代に対して、いろいろな疑問を出したり、否定的な言葉を吐いたりしています。

森鷗外は、晩年に徳川時代の漢方医で明治時代にはほとんど忘れられてしまつて、そしてもし鷗外が書き残さなかったら、我々は全然知らないだろうと思うような人たちの伝記を非常に熱情をこめて書いています。「渋江抽斎」であるとか「井沢蘭軒」であるとか、あるいは「北条霞亭」とかいうような作品の題は皆さんもご存知でしょう。

そういう、人が全部忘れてしまったような学者の伝記を、非常に敬意をこめて書いている。なぜ書いたかということは、鷗外は、人がそれについてなにか尋ねても答えていません。自分は、ただ書きたくて書いている、というようなことを言っています。

恐らく、日本人は西洋の影響を受けてから悪くなった、今の文明のあり方を見ると、日本人に将来救いがあるかどうか分からない。ただ、そういう西洋の影響を受けない前の日本人のある人々の生き方に、自分は非常な尊敬を感じて、そういう人たちの生き方に及ばずながら自分も従つてゆこうという気持ちに、やつと自分の救いを見いだすというのが鷗外の考えであつたようです。

鷗外のように、西洋もよく知っており、自然科学の知識もあり、最も日本の近代化ということ

を評価してもいいような人が、非常に否定的であつた、これは我々が記憶しておいてよいことだと思います。

同じようなことが漱石についても言えます。漱石は、鷗外よりよほどおしやべりですから、自分の思想をはつきり述べているのです

が、その中で有名なのは、この人が和歌山県でやつた「現代日本の開化」という講演でしょう。これは、漱石の思想の核心に触れている講演です。読んでもなかなかおもしろい。洒落で、ユーモアにも富んでいて、時々、聴衆をうまく笑わせたりしています。しかし、内容は近代日本の文明について非常に悲観的な見方をしています。漱石は、そこですでに文明というもののあるいは文化（開化という言葉を使っていますが）は、内発的な開化と、外発的な開化と二つある。外発的とい

うのは内部から出るものでなくて、外からの刺激によつて文化が大きく変わることです。内発的とは、ちやうど時候が暖かくなつて花が開くとか、雲が天空を飛んでいくとか、これは漱石の比喩なのですが、そんなふうに、内から自然の力に押されて何かができあがるということです。

ところで、日本の開化はどうか。漱石の見るところでは、徳川時代の終わりまでとはいえない内発的に進んできた、と言う。これにはだいたい問題があるでしょう。なぜなら、日本は古代から外来文化を輸入し続けてきた、という事実があるわけです。しかし結局のところ、私は漱石の考えが正しいのではないかと思います。

日本は島国で荒い海に囲まれている。外国が現実の力になつて襲つてくるといふことは何百年、何千年に一度ぐらいの例外はあるが、ふだんは適当にその海が、ちやうどフィルターのような役割を果たしてくる。したがつて、外国は敵対する力としてでなく、いつも文化として入ってくる。仏教も儒教もそうでした。外国人というのは、い

つも珍しいお客さんであつて、歓迎してかえせばよい。氣に入らない時は殺してしまえばよい。キリシタンが入ってきた時はそれをやつた。江戸時代ごろまでの外国との接触は、いつも自然によつて守られていたのです。

ところが十九世紀になつて、蒸気船ができる。海という自然の力を征服してしまうような交通機関が発明され、それによつて外国は初めて現実の力、侵略的な力として我々の周りに迫ってきた。そうした

力に動かされて、明治維新が達成されたわけです。今から見れば、ずいぶんのんきなものであつたにしろ、当時の日本としては

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

大事件でした。

明治維新は、つまり日本の近代化の出発点は、単に優れた文化に接してこれを学ぶというような穏やかなものでは決してなかった。それを学ばなければ、こつちがやられてしまう、国としての独立を維持してゆくことができない、という事情があったのです。こつちが生活している社会組織を西洋風に改めなければ、逆に、西洋人の力によって、こつちがいやおうなく西洋風にされてしまう、そういう危機として、外国が現実の力を振るつたわけです。ですから、日本が初めて外発的な力に動かされた、と漱石が言うのも、決して誇張ではなかったのです。

日本の近代化ということは、他の国々、特にアジアの外の国々に先立って行われた。先に立ってやったということ、時間的に早かったということは、やがて追いつかれるということでもあります。そうなった時に、かえって後から来る人のほうが、自分たちの中でいちばん大事なものを失わないですんだということもありうるかもしれません。人より先にやったということに、必ずしも安んじていないほうがいいのではないかというふうに、私は思います。

(中村光夫の文章より)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



四年も前のことだから正確には「近頃」ではないのだが、私にとつては昨日の出来事よりずっと鮮烈な話なのである。昭和六十年の夏、私は撮影のためにヒマラヤの麓、ネパールのドラカという村に十日余り滞在していた。海拔千五百メートルの斜面に家々が散在して、はりつくように広がっている村で、電気、水道、ガスといったいわゆる現代のライフ・ラインはいつさい来ていない。四千五百の人口があるのに、自動車はもちろん、車輪のある装置で他の集落と往来出来る道がないのだ。しかも、二本の足で歩くしかない凹凸の山道をいたる所で谷川のような急流が寸断している。そこにさしかかたら、岩から岩へ命がけで跳ばなければならぬのだ。手押し車も使えないから、村人たちは体力の限界まで荷を背負ってその一本の道を歩む。だから、茂みが動いているのかと驚いてよく見ると、下で小さな足が動いていたりするのだ。燃料にするトウモロコシの葉の山を、幼い子供が運んで行くのである。昔日本でも村の共有地である入会山で柴を刈る時は、馬車で持つて帰ることなど禁じられていた。自分の体で背負えるだけしか刈ってはいけない。自分が背負える分量だけ刈るのなら、お天道さまに許される、という思想があつたのである。

時代は違うが、車を転がせる道が無いおかげで、ドラカ村の人々は結果的に環境保護にもかない、お天道さまにも許される生活をしていくわけだ。しかし、昔のことはいざ知らず、いま村人たちは自動車の通れる道路をふくむいつさいのライフ・ラインに恵まれていない自分たちの生活が、世界の水準より下だと熟知している。だから、旅行者には桃源郷のように見える美しい風景の中で、かなりつらい思いで暮らしているのだ。とりわけ若者たち、子供たちには村を出て電気や自動車のある町へ行きたいという願望が強い。それも無理ではないのであつて、私たちにしても車が使えないここでの撮影は一瞬一瞬が重装備の登山なのだ。車で来られる最終地点から村までは、十五人もポーターをやとって機材や食糧を運んだのだが、余分なものをいつさい割愛せざるを得なかった。真つ先にあきらめたのがビールである。なにより、重い。アルコールとしてならウィスキーの方が効率的だ。それを六本、一人一本半ずつ持て

ば、四人で十日間なんとかなるはずだという計算であきらめた。しかし、ウィスキーとビールとではその役割が違うのである。大汗をかい一日の撮影が終わった時、眼の前に清冽な小川が流れているので思わず言った。「ああ、これでビールを冷やして飲んだら、うまいだろうなあ」と。スタッフ全員で協議した末にあきらめたビールのことをいまさら言うのはルール違反である。しかし、私が口にしたその禁句を聞きとがめたのは、私の同僚ではなくて村の少年のチュトリ君であつた。「今、この人は何と言つたのか」と通訳に聞き、意味が分かると眼を輝かしていった。「ビールが欲しいのなら、僕が買ってきてあげ

（吉田直哉「ネパールのビール」）



「……どこへ行って?」「チャリコット」——チャリコットは私たちが車を捨ててポーターをやとった峠の拠点である。トラックの来る最終地点なので、むろんビールはある。峠の茶屋の棚に何本かびんが並んでいるのを来る時に眼の隅で見た。でも、チャリコットまでは大人の脚でも一時間半はかかるのである。「遠いじゃないか。」「「だいたいようぶ。真っ暗にならないうちに帰ってくる。」「ものすごい勢いで請け合おうのでサブザックとお金を渡して頼んだ。」「じゃ、大変だけど、できたら四本買ってきてくれ。」「と。張りきつてとび出して行ったチュトリ君は八時頃五本のビールを背負って帰って来た。私たちの拍手に迎えられて。——次の日の昼過ぎ、撮影現場の見物にやって来たチュトリ君が「今日はビールは要らないのか。」「と聞く。前夜のあの冷えたビールの味がよみがえる。「要らないことはないけど、大変じゃないか。」「「だいじようぶ。今日は土曜でもう学校はないし、明日は休みだし、イスタルをたくさん買ってきてあげる。」「STARというラベルのネパールのビールを現地の人びとは「イスタル」と発音する。うれしくなつて昨日より大きなザックと一ダース分以上ビールが買えるお金を渡した。チュトリ君は昨日以上に張りきつてとび出して行った。ところが、夜になつても帰って来ないのである。夜中近くになつても音さた無い。事故ではないだろうか、と村人に相談すると、「そんな大金を預けたのなら、逃げたのだ。」「と口をそろえて言うのである。それだけの金があったら、親の所へ帰ってから首都のカトマンズへだつて行ける。きつとそうしたのだ、と。十五歳になるチュトリ君は一つ山を越えた所にある、もつと小さな村からこの村へ来て、下宿して学校に通っている。土間の上にむしろ敷きのベッドを置いただけの、彼の下宿を撮影し話を聞いたので、事情はよく知っているのだ。その土間で朝晩チュトリ君は、ダミアとジラというこうしんりよう、とうがらし香辛料を唐辛子に混ぜて石の間にはさんですり、野菜と一緒に煮て一種のカレーにしたものを飯にかけて食べながらよく勉強している。暗い土間なので、昼も小さな石油ランプをつけてベッドの上に腹ばいになつて勉強している。そのチュトリ君が、帰って来ないのである。明くる日も帰って来ない。その翌日の月曜日になつても帰って来な

い。学校へ行つて先生に事情を説明し、謝り、対策を相談したら、先生までが「心配することはない。事故なんかじゃない。それだけの金を持ったのだから、逃げたのだろう。」「と云うのである。

——歯ざしりするほど後悔した。ついつつかり日本の感覚で、ネパールの子供にとつては信じられない大金を渡してしまった。そして、あんないい子の一生を狂わした。でも、やはり事故ではなからうかと思う。しかし、そうだったら、最悪なのである。いても立つてもいられない気持ちで過ごした三日目の深夜、宿舎の戸が激しくノックされた。すわ、最悪の凶報か、と戸を開けるとそこにチュトリ君が立っていたのである。泥まみれでヨレヨレの格好であつた。三本しかチャリコットにビールがなかったもので、山を四つも越した別の峠まで行つたという。合計十本買ったのだけれど、転んで三本割つてしまったとべそをかきながらその破片を全部出して見せ、そして釣銭を出した。彼の肩を抱いて、私は泣いた。近頃あんなに泣いたことはない。そしてあんなに深く、いろいろ反省したこともない。

(吉田直哉「ネパールのビール」)



吉を、どのような人間にしたてるかということについて、吉の家では晩餐後、毎夜のように議論された。またその話がはじまった。吉は牛にやる雑炊をたきながら、しばの切れ目からぶくぶく出るあわをじつとながめていた。

「やつぱり吉を大阪へやるほうがいい。十五年もしんぼうしたなら、のれんがわけてもらえるし、そうすりや、あそこだからすぐにお金もうけもできるし。」

そう父親がいうのに母親はこう答えた。

「大阪は水が悪いというからだめだめ。いくらお金をもうけても、早く死んだらなんにもならない。」

「百姓させればいい、百姓を。」と、兄はいった。

「吉は手工が甲だから、信楽へお茶わんを作りにやるといいのよ。あの職人さんほど、いいお金もうけをする人はないっていうし。」

そう口をいれたのは、ませた姉である。

「そうだ、それもいいな。」と、父親はいった。

母親はだまっていた。

(中略)

その日、吉は学校で三度教師にしかられた。

最初は算数の時間で、仮分数を帯分数になおした分子をきかれたときに、だまっていたので、

「そうれ見よ。おまえはさつきから窓ばかりをながめていたのだ。」と教師ににらまれた。

二度めのときは習字の時間である。そのときの吉の半紙の上には、字が一字も見あたらないで、お宮の前のこまいぬの顔にも似ていれば、まだ人間の顔にも似つかわしい三つの顔が書いてあった。そのどの顔も、笑いを浮かばせようとほねおった大きな口の曲線が、いくども書きなおされてあるために、まっ黒くなっていた。

三度めのときは学校のひけるときで、みんなの学童が包みをしあげて礼をしてから出ようとすると、教師は吉をよびとめて、もういちど礼をしておせとしかった。

家へ走り帰るとすぐ吉は、鏡台の引き出しから油紙に包んだかみそりを取り出して、人目につかない小屋の中でそれをみがいた。ときおわると軒へまわって、積みあげてある割り木をながめていた。

それからまた庭へはいって、もちつき用のきねをなでてみた。が、またふらふら、ながしもとまでもどつてくると、まないたをうらがえしてみたが、急に井戸ばたのはねつるべの下へ走っていった。

「これはうまいぞ、うまいぞ。」

そういいながら吉は、つるべのしりのおもりにしばりつけられた、けやきのまるたを取りはずして、そのかわりには石をしばりつけた。

しばらくして吉は、そのまるたを三、四寸も厚みのある、はばひろい長方形のものにしてから、それといっしよに、えんぴつとかみそりとを持って屋根うらへのぼっていった。

一月もたつと四月がきて、吉は学校を卒業した。

しかし、すこし顔色の青くなつたかれは、まだかみそりをといては屋根うらへかよいつづけた。そしてそのあいだもときどき家のものは、ばんめしのあとの話のついでに吉の職業を選びあった。が、話はいつこうにまとまらなかつた。



ある日、昼めしをおえると父親は、あごをなでながらかみそりを取り出した。吉は湯をのんでいた。

「だれだ。このかみそりをぼろぼろにしたのは。」

父親は、かみそりの刃をすかして見てから、紙のはしを二つに切つてみた。が、すこしひつかかった。父の顔はすこしけわしくなつた。

「だれだ。このかみそりをぼろぼろにしたのは。」

父はかたそでをまくつて、うでをなめると、かみそりをそこへあててみて、

「いかん。」といった。

吉はのみかけた湯をしばし口へためて、だまつていた。

「吉がこのあいだといっていましたよ。」と、姉は言った。

「吉、おまえどうした。」

やっぱり、吉はだまつていた。

「うむ、どうした？」

「ははあ、わかつた。吉は屋根うらへばかりあがつていたから、なにかしていたにきまつている。」と、姉はいつて庭へおりた。

「いやだ。」と、吉はさけんだ。

姉は梁のはしにつりさがつているはしごをのぼりかけた。すると吉は、はだしのまま庭へおりて、はしごを下からゆすぶりだした。

「こわいよう、これ、吉つてば。」

かたをちぢめている姉は、ちよつとだまると、口をとがらせてつばをかけようとした。

「吉つ。」と、父はしかつた。

しばらくして屋根うらのおくの方で、

「まあ、こんなところに面がこさえてあるわ。」という姉の声がした。

吉は姉が面を持つておりてくると、とびかかった。姉は吉をつきのけて面を父にわたすと、父はそれを高くささげるようにして、しばらくだまつてながめていたが、

「こりやよくできとるな。」

また、ちよつとだまつて、

「うむ、こりやよくできとる。」といつてから、頭を左へかしげかえた。

面は父親を見おろして、ばかにしたような顔でにやりとわらつていた。

その夜、納戸で父親と母親とは、ねながら相談した。

「吉をげた屋にさそう。」

最初にそう父親がいうと、いままでだまつていた母親は、

「それがいい。あの子はからだがよいから遠くへやりたくない。」といった。

まもなく吉はげた屋になつた。

吉の作つた面は、その後、かれの店のかもいの上でたえずわらつていた。むろんなにをわらつていのかだれも知らなかつた。

吉は二十五年、面の下でげたをいじりつづけてびんぼうした。

ある日、吉はひさしぶりでその面を見た。すると面は、いかにもかれをばかにしたような顔をしてにやりとわらつた。吉ははらがたつた。つぎにはかなしくなつた。が、またはらがたつてきた。

「きさまのおかげで、おれはげた屋になつたのだ。」

吉は面をひきおろすと、なたをふるつてその場でそれを二つにわつた。しばらくしてかれは、げたの台木をながめるように、われた面をながめていたが、なんだかそれでりつづばなげたができそうな気がしてきた。



読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「どんなときにイヌは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A イヌは、相手が小学生ぐらいだと、簡単に人を襲う

B 気の弱いイヌは、吠えて仲間を呼ぼうとする

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「どんなときにイヌは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 相手がそれ以上近づくと不快感を持つ距離を臨界距離という

B イヌにとって、眼を合わせることは挑発を意味する

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「冬のパリは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A パリの若い母親は、小さい子が親から離れないように、子供に首輪とひもをつけている

B ヨーロッパの家畜飼育法は、日本の教育においても見直されている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「冬のパリは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 昼どきの日本の電車内は、子どもたちがのびのびと遊んでいる

B 日本は無畜農業の国で動物に甘いので、動物の種類が多い

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「竹下君よ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 竹下君というのは、進の名前である

B 進は、みんなに、家から持ってきた乾燥いもをくれた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「竹下君よ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ぼくは、昇がクラスのリーダーになればいいと思っていた

B ぼくは、進も含めてみんなが同じようにつき合えるクラスを夢見ていた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「潔」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ぼくは、進が本を読んでいい人間になってほしいと思った

B ぼくは、進が本当はやさしい人間なのだと思ってきた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「潔」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ぼくと進は、すっかり意気投合し親友になった

B ぼくは、自分が自分の心に忠実でないと思った

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「後の世話が大変だから」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「萌えたった若葉」という言葉から、季節は春から夏にかけてだとわかる

B ぼくは最初普通の小雀をつかまえようとしたが、作戦を変更して発育の遅い小雀をつかまえることにした

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「後の世話が大変だから」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「心にくいいるものを感じていた」というのは、取り逃がしたことに對する後悔の気持ちである

B 「火をたくお陽様に投げこんで」というのは、その小雀をつかまえるのをもうあきらめてということである

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「みっちゃんは、私より」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 馬になれるような子がみっちゃんしかいなかったのは、みっちゃんが我慢強かったからである

B 私に泥と血を洗っているところにやってきたみっちゃんは泣きながら私に謝った

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「みっちゃんは、私より」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私がみっちゃんに水をかけたのは、大人がいて自分に有利な状況だったからだ

B 私は、物置にメンコとお金を隠し、みっちゃんが疑われるようにして、復習を果たした

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「自宅や会社の電話番号を忘れないのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 勉強に復習が大切なのは、記憶を定着させる働きがあるからだ

B 記憶力を高めるには、反復学習よりも、絶対に忘れないという自信が大切である

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「自宅や会社の電話番号を忘れないのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 印象深く心に刻みつけられることであっても、反復しなければ、よく電気信号が通じる回路にはならない

B 引き出しを開ける糸を何本もつけるといのは、何度も繰り返し覚える練習をするということである

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「人間が自由で平等だというようなことは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 人間が自由で平等だという近代の考え方は、日本人が自らの力で生み出したものだ

B 鷗外は、西洋の影響を受ける前の時代の日本人のある人々の生き方に尊敬を感じていた

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「人間が自由で平等だというようなことは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人は、敵対する力として入ってくる外国を、いつも文化として受け入れていた

B 漱石は、明治維新が日本人の内発的な力で行われたことを評価していた

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

- 問1 読解マラソン集9番「四年も前のことだから」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の昔の思想「お天道様に許される」量は自分の背負える量というのと、ドラカの人々の意識は明らかに違う。
B ドラカでは、いっさいのライフラインは、そういうものがあることすら知られていない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問2 読解マラソン集9番「四年も前のことだから」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 大変な思いをして撮影を敢行している筆者は、村の若者や子供が便利な町へ行きたいという気持ちがわかる。
B チュトリ君は、あきらめたビールのことを今さら言う筆者をとがめるつもりで発言した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問3 読解マラソン集10番「どこへ行って」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A チュトリ君は、ビールを買いに行くことにやる気まんまんであった。
B 村の人たちはみな、チュトリ君は逃げたのだと思っていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問4 読解マラソン集10番「どこへ行って」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A チュトリ君に大金をわたして、ビールを頼んだのは取り返しのつかないことになってしまった。
B チュトリ君は、誠実で、頼まれごとを果たすため、精一杯がんばったのであった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問5 読解マラソン集11番「吉を、どのような人間に」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 吉は、自分の将来について家族が話しているとき、一切口をはさまなかった。
B 母親は、吉の健康を心配して大阪行きに反対した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問6 読解マラソン集11番「吉を、どのような人間に」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 吉はふだんは、優等生である。
B 吉は、自分についてあれこれうるさい家族をいたずらで困らせようともくろんでいた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問7 読解マラソン集12番「ある日、昼飯をおえると」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 姉は、吉が屋根うらでこっそり何かをやっていたのではないかと疑った。
B 父親は、とりえのない吉を励ますためにわざと面をはめた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問8 読解マラソン集12番「ある日、昼飯をおえると」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「きさまのおかげで、おれはげた屋になったのだ」というのは、大きな勘違いである。
B われた面を眺めていた吉は、かすかに希望のようなものを感じている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パ ス： PDF	高2 コード： nane パ ス： PDF	高3 コード： nane パ ス： PDF